

111. 最近の滋賀県下における 発掘調査の紹介

その4

27. 伝説の村「天山村」を発掘

野洲町北桜 北桜遺跡

この遺跡は野洲町大字北桜の東方、阿麻山の裾に広がっていたと言われる「天山村」および「天山寺」の一部に当たると考えられる。調査は、団体営は場整備に伴う事前調査で、大きく二か所の高まりの張り出した所で遺構を検出した。北西側では、山に向かって長く両面に底を持つと考えられる掘立柱建物をはじめ、多くの柱穴・井戸跡・溝などが確認され、それに伴って大量の中世の日常雑器が出土している。一部では、弥生時代中期後半の遺物を出土するが、中世の切り込みがはげしく、遺構の性格については明らかでない。なお、後に行った下手での調査でも、同時期の遺物を含んだ層や溝、ピットなどが若干確認されている。一方、東方の部分でも、鎌倉時代頃の多くの溝とともに、掘立柱建物や土塋等が発見され、布目瓦片も採集され、この調査地のやや上流に寺院が存在した可能性が強い。ここでは、奈良時代近くの土塋墓状の遺構も二か所検出されている。

かつて、北桜の地には蓬萊衆がいて御上神社に土鍋を供えていたと言われ、この地で土器を焼いていた可能性が考えられ、すき入りの焼土や水田部で大きな粘土取り穴状の落込みが数個確認されており、その関係



北桜遺跡

が注目される。(野洲町教育委員会 古川与志継)

28. 須恵器の生産集落か

野洲町大篠原 夕日ヶ丘遺跡

大篠原成橋夕日ヶ丘の北方には、14基の須恵器窯が確認されているが、今回の調査は窯の前面に当たる水田を発掘した。新しい時代から順に記すと、表土床土下には戦前まで使われていた水道管や、江戸時代以降の水田の区画が検出された。

A3区には、平安時代末期頃の掘立柱建物4棟があり、柱穴の中から、土師器の台付皿や黒色土器塊が出土した。

B9とAB-1314区には、円形、隅丸長方形、楕円形の土塋(径2~3m)群が総数130基ほど検出された。土塋の中には、須恵器坏身・坏蓋・短頸壺・横瓶・甕等が出土している。珍しい遺物として、須恵器の土鈴が一点土塋埋土最上層からみつかった。これらの土塋は、土塋墓、粘土取りの穴、貯蔵穴等の可能性が考えられる。

A23区には、巾約1.5mの溝が検出された。埋土中からは、少量の須恵器と多量の甕を中心とする土師器が見られる。

土塋群と溝は、須恵器生産時期(6世紀中葉~7世紀前期)に一致し、夕日ヶ丘北須恵器生産集落の一部と考えられ、付近に工房跡及び居住地を推定させ、遺物の散布から現在の長島の集落にまで広がる大生産集落であるといつてよいであろう。

B78区の包含層には、須恵器と共に、須恵質の埴輪片が12、3点出土した。これらの埴輪片は、5世紀後半に比定され、すぐ上にある古墳に置かれていたものか、埴輪窯の存在をうかがわせる。

B9には、いくつかの落ち込みが検出され、少量の須恵器と共に古式土師器数片・ガラス小玉1点が出土した。

A4とB8区には、サヌカイト剥片が10点ばかり確認され、A4区のピット埋土内から須恵器の杯蓋とともに、サヌカイトの横刀型石器1点が出土した。これは、長野県の縄文時代中期~後期遺跡に例があり、守山市寺中遺跡にも同じものが出土している。丘陵上に縄文集落を想定したい。

(野洲町教育委員会 中川通士)



小篠原遺跡

29. 郡衙跡との関連か

野洲町小篠原 小篠原遺跡

小篠原遺跡は、野洲町の中心に位置する遺跡で、野洲駅の南方、旧中山道にいたる区域を範囲とする。この区域でも、郡衙跡推定地とされる所はおおよそ南北に軸をもつ特殊条里が存在する。今回、調査対象となったのはこの郡衙跡推定地の北西端に当たる。昭和55年度には今回の調査区と道路を距てた地点を調査しており、また小字名の「堂ノ後」から郡衙等の存在が考えられた。

さて、遺構については、第四層目から中世後期、室町期と思われる耕作痕が検出されている。一区画として確認できたものは南北にスキ痕をもつ約7m×15mの規模のもので、その西方にはそれと直交する形で耕作痕を検出した。そして、たぶん南北方向にスキ痕をもつ耕作地に伴う溝を東側の調査区で確認している。ついで、中世の土壌を2基検出。1基は径60cmの円形をなし、燈明皿、黒色土器碗、羽釜等一括して検出し、また一方の土壌は、1.2m×70cmの方形をなすもので、2段に掘られ、羽釜、フイゴ等が確認されている。ついで、奈良時代、ちょうど郡衙跡と関連づけられる遺構として、大きく三群に分けるピット群、これはおおよそ南北方向に近いもので、掘立柱建物群が想定されそれに伴う溝も一条検出した。そして、その建物と同時期と考えられる木柵井戸も認められた。これは赤松材を用いた四隅横棧止め縦板井戸と称されるものである。底面より計14個の須恵器（有蓋短頸壺、横瓶等がほぼ完形で出土）が出土している。

（野洲町教育委員会 河合葉子）

30. 前方後方形周溝墓か

野洲町富波字亀塚 富波遺跡

富波遺跡は過去数次による調査で弥生時代末（遺物

採集）～平安、鎌倉時代まで続く集落跡としてみとめられていた。今回、調査は、宅地造成に伴うものであり、現況は海拔約93mの水田である。周囲に目を向けると、近江でも発生期に位置付けられる古富波山古墳、西約500mには弥生時代中期～古墳時代中期まで続くと考えられる五之里遺跡が近接している。

調査当初、富波遺跡の北限地と推定し調査を進めていき、中世のピット、溝、井戸等、生活の跡を知ることが出来た。前方後方形周溝墓？は同一面、床土下で初めて検出され、削平墳丘面に平安期のピットの掘りこみが見られること等から、平安期以前には何らかの要因で削平をうけフラットな面が形成されていたものと思われる。墳丘の立ち上りや、後方部中心位の想定、主体部の掘方の痕跡等から見て、そんなに高い盛土はもたれていなかったと思われる。

特筆する事は、周溝がいわゆる相似形をとると言う事であるが、左右対称にならず、北側周溝においては、墳丘主軸線に並行する。また前方部先端に、溝状の土壌を持つなど性格については決め難いが、それらが、特に注目される。平面形態からは4世紀後半～5世紀初頭に位置付けられるが、土器を伴う遺構の切りこみから、庄内終末～布留初の時期が与えられると思う。年代は、遺物の絶対量、墳丘削平等から決めたいが、近江でも最古期に属すると考えられる野洲古墳群の中で、平地部検出の前方後方形を呈する墳丘墓をどうとらえるかが今後の大きな問題となろう。

（野洲町教育委員会 長井秀之）

31. 大型倉庫跡

甲西町針新田 井戸遺跡

井戸遺跡は、新設県立甲西高校（仮称）の建設に伴い、昭和57年7月～58年2月にかけて、確認・発掘調査を実施した。甲賀郡甲西町針新田字井戸に所在する遺跡である。本調査では高校建設予定地の調査対象地区に体育館（約4300㎡）・擁壁（約2900㎡）、運動場（約1400㎡）、自転車置場（約400㎡）の合わせて約9000㎡のトレンチを設定し発掘調査を行った。

調査の結果、体育館トレンチにおいて野洲川の氾濫によるバラス堆積土壌上に掘立柱の柱穴が多数検出できた。なかでも倉庫跡と思われる柱穴群が2棟分認められ、1棟は梁行2間（3.6m）×桁行3間（4.8m）の南北棟、他1棟は梁行、桁行ともに3間（5.6m）の建物で、ともに中央に東柱を持つところから倉庫と思われるが、遺跡内での性格は不明である。またこれらの建物を区切るように数条の溝が認められた。同一遺構面が広がる自転車置場・擁壁の西半においても同様な溝といくらかの柱穴が確認されている。これらの遺構面の時期は出土遺物より8世紀～9世紀にかけての



井戸遺跡

ものであった。擁壁部東奥の位置に現地形通りの微高地を確認、この微高地上に庄内布留式並行期の土器を含む、竪穴式住居跡が2基と多数の柱穴、土壌を検出した。うち1棟の住居跡の床面上南側壁溝のそばでは、底部穿孔一穴の甑の底部・小型の鉢・ミニチュアの杯が3個体、立ったままの形で発見された。

運動場部トレンチでは、確認調査ではあるがトレンチを東西に横切る様な溝が数条と若干の柱穴、不整形の土壌が認められた。時期は体育館トレンチの遺構とはほぼ同時期のものと考えられる。(滋賀県教育委員会 木戸雅寿・(財)滋賀県文化財保護協会 清水 尚)

32. 戦国期～江戸期の屋敷跡

安土町石寺地先 石寺八ノ坪遺跡

調査は安土町楽市楽座会館建設に伴う緊急調査として、工事の都合により、一次、二次にわたって町教委によって行われた。調査地は叡山の麓、安土町石寺地先にある。

調査の結果、戦国期から江戸期の屋敷跡が検出された。屋敷跡は石垣をもって区画され、平面形は逆L字形を呈する。屋敷地内は三か所に区切られており、そ



石寺八ノ坪遺跡

の建物は礎石建ち建物であったらしく、各所に礎石やその根石等が発見されたがその規模等については現時点では明確ではない。これらの建物跡はその内部については版築状に築土されている。つまり、旧耕土上に黄褐色砂を20～15cm埋めこみ、その上部にしゅくい状の白色粘質土を貼り、石垣をつくり赤褐色土、炭・黄褐色粘質土などを互層に版築してある。なお、その最上部には焼壁片を多く含む赤褐色土があるが、これが屋敷地の造成の際に埋めこまれたものか、あるいは後代に地ならしされたかは明確ではないが、そのさらに上部にもう一層焼土層があり、これら建物跡が焼損した事は明らかであり、それが戦国争乱の由か、はたまた後代の失火かについて現在考究中。屋敷地内には石蓋を持つ石組みの暗渠排水施設がありそれは石垣下をくぐり西方へ延びていた。石垣施設は30×20cm程度の長楕円形の河原石を加工せずに積み上げたもので、三段～一段(北へ地が高くなる)の規模、三段積み上げた部分では約50cmの高さがある。出土遺物はあまり多くないが、各種陶磁器の他、鉛玉(鉄砲玉か)、刀の考え金具などがある。(埋蔵文化財センター 松沢 修)

112. 八日市市中羽田字西山所在の 八幡社古墳について

八幡社古墳は雪野山東麓に位置する前方後円墳の墳形をとる後期古墳であり、その完好な保存状況は湖東唯一であり、これに次ぐものは竜王町薬師岩屋古墳において外にはない。内部に3つの横穴式石室をもつことも特異である。それらの規模は表のとおりである。

石室は三基が一度に造られたものではなく、1号—2号—3号の順に構築されていったと予想される。なお、最後にこの特異な古墳の主については、壬申の乱で天智方から天武方に寝返ったことで著名な羽田君の祖先の墓ではなかったかと想像されるのである。

この古墳群に関しては、墳丘測量図、地形測量図、石室実測図が作成されており、いずれも学術上貴重な資料であるため、ここに未公開の八幡社古墳墳丘測量図を紹介した。

なお、この墳丘測量図は近藤が八日市市役所の協力を得て作成したものであり、古墳群の地形図や石室実測図は紙幅の都合で割愛するが、それらについては、八日市市史編纂室が大谷大学学生の援助を得て作成したものである『八日市市史』第1巻古代の巻末資料を参照されたい。(丸山竜平、近藤 滋、黒坂秀樹)

全 長	24m	1号石室	
前方部幅	12m	全 長	7.5m
後円部径	12m	全 長	4.0m
前方部高	3m	幅	2.0m
後円部高	4m	幅	2.3m
		羨道 長	3.5m
		幅	1.0m
		高	1.2m



2号石室

全長 6.0m
 玄室長 3.0m
 // 幅 1.2m
 // 高 1.9m

羨道長 3.0m
 // 幅 1.0m
 // 高 1.3m

副室 奥行 1.3m
 幅 1.0m
 高 1.5m

3号石室

全長 5.5m
 玄室長 2.7m
 // 幅 1.0m
 // 高 1.5m

羨道長 2.8m
 // 幅 0.7m
 // 高 1.1m

